

# 若者のコミュニケーションへの視線

齊藤吉広

---

## ●要約

「近頃の若い者は…」という批判的な視線はいつの時代にもあったが、成熟した現代社会においては増幅されて世代間断絶が語られがちである。特に若者のコミュニケーションについてはその「希薄化」や「メディア依存」が強調されてきたが、それらは若者世代に固有なのではなく、消費社会化や都市化が生み出した社会全体の抱える問題である。

## ●キーワード

若者

世代

コミュニケーション

メディア

ケータイ

# 1 若者への視線

## 社会変動の函数としての世代間断絶

古代エジプトの時代に遺された碑文にはすでに「近頃の若い者は…」とある、という指摘は若者論が語られる中でよく引き合いに出されてきた(1)。いつの時代にも世代間の意識やふるまい方にはギャップがあるのであって、「近頃の若い者は…」と感じる世代の大人が若者のころにはやはり同様に感じられていたのであり、ことさらに“いま”の若者が異常だということはないのだという意味合いで持ち出される。

だが実際には、伝統的社会にあっては世代間のギャップを生み出す社会変動は基本的に生起しない。変動しないことが「伝統的社会」たるゆえんだからである。したがって社会変動が常態化する近代以降の社会においてこそ、変化への適応の仕方が世代ごとに異なってギャップが生まれることになる。シュツツにならって、われわれがそのつどの相互行為において「普通のこと」を確認し合う思考のパターンを「日常的な思考」と呼ぶならば、そうした「日常的な思考」と時代性とが世代ごとに対応し、それが世代間断絶を生じさせる根拠となる(2)。つまり若者には大人世代の常識が通用しなくなり、そうした事態への違和感や嫌悪感や恐怖感が「近頃の若い者は…」という表現となるのだと言える。

こうした意味では、世代間断絶は世代間の問題であるよりも社会の変化の問題なのであるから、「いつだって若者は常識外れだった」というレトリックで相対化し、若者バッシングを中和しようとするのでは、背景にある時代の変化から目をそらすことになる。むしろ前の世代が後の世代を準備したという変化の中の「連続性」に着目することによって、「断絶」の意味を正確に認識することが可能になるだろう。

### 「安定平衡」の下での「断絶」

述べたように社会変動が世代間断絶の基盤であるのだが、見田宗介は1970年代までは常識的な感覚であった「加速度的」な社会の変化はその後すでに「減速」の時代を迎えており、そのことがここ30年間の社会意識の「安定平衡」を基礎づけているという。データを検証すれば、戦争世代と団塊世代の親子に比べて、団塊世代と団塊ジュニアの親子の意識の差ははるかに小さい。経済社会の加速度的な成長を支えてきた近代家父長制家族においては、人間の生の全領域における生産主義的な手段化＝合理化が貫徹していたが、成長の減速に対応してそうした手段化＝合理化への要請は弱まってそこに付随するメンタリティは崩壊を見せているというのだ。メンタリティの崩壊とは性別役割分業意識の低下であり、性のモラルの変容であり、「仕事と余暇」への態度の変化等々である(3)。

確かに現在の日本社会は、経済的な低成長の下で「ポスト産業社会」「成熟社会」などと称される状態にあり、高度成長期などからすれば明らかに「減速」の時代にあることは首肯できる。しかしながら社会意識が「安定平衡」しているというのは言ってみれば見田がデータから「発見」したことであって、われわれの実感に必ずしも合致するものではなかろう。それはつまり、「近頃の若い者は…」という物言いがまったく力を失っていないというところに現れている。

財界と政府による労働市場の改革政策が非正規雇用の増大を招き、それが新規に労働市場に参入する若年層から順に適用されたがゆえに「フリーター化する若者」という形となってまずは現われたのだが、何よりもそれは若者自身の「やる気のなさ」の問題であるとされた(4)。労働者派遣法や中高

年リストラなど新自由主義的政策の効果が徐々に姿を現していたその延長線上に労働市場全体のフリーター化は進行しているのだが、それは「世代間断絶」の問題としてまず理解されたし、現段階でもそうした受け取り方が払拭されているとは言い難い。

またたとえば「少年犯罪の急増・凶悪化」というフィクションが広く信じられているという点においても、世代間の差異を強調しようという社会意識が見て取れる。しかもその現実には起きていない「急増・凶悪化」に対策を立てるべく躍起になり、少年犯罪への厳罰化やメディア規制が進められている。自らの世代の方がよほど大量の凶悪犯罪者を輩出しているにもかかわらず、「凶悪」で「理解できない」若年世代という像をつくり出し、ここでもやはり「世代間断絶」の問題として社会不安を説明しようとするのである。

若者への違和感を説明ないし補強してくれるまた別のコンセプトがたとえば「ゲーム脳」である。これは「少年犯罪の急増・凶悪化」を根拠づけようとする際にも持ち出されるのだが、より一般的に、「日常的な思考」を異にするようにしか見えない若者たちのふるまいを説明しようとするものである。「ヘンなことをするのは、ヘンな人間だからだ」という図式でしかないのだが、そこに「ゲーム」という使用実績において世代間断絶のあるメディアを持ってくることによってうまく「近頃の若い者は…」という感覚に接続できるものになっている(5)。

### イデオロギーとしての「世代間断絶」

このように見てくると、「世代間断絶」という社会意識を社会変動の函数としてだけ理解することには無理が生じてくるように思われる。実態としての世代間の差異を必ずしも反映しない「断絶」が強調されているからである。変化の微分係数そのものは大きくないにもかかわらず、ギャップが不当に大きく意識されているとすれば、それは虚偽意識として存立しているということになろう。「小さいものが大きく見える」という事態は、「小さいものを大きく見る/見ようとする」という“見る側”の視線にかかる問題である。つまり若者が「理解できない」対象や「恐怖」の対象として立ち現れるのは、「理解しようとしないう」態度や「不寛容」などの主体の側の働きによって増幅されている可能性があるということだ。

大江健三郎はかつて自らの作品の受容のされ方について、欧米人が「理解できない」という認識から「理解しよう」という営みを開始するのに対して、日本人は「理解できない」というところで思考停止してしまう、理解への努力を放棄してしまうと述べていた。その対比が正確なものであるかどうかは確認できないが、「近頃の若い者は…」という物言いが「理解できない」すなわち「思考停止」を決め込む宣言になっているのは事実であろう。結果として、世代を問わずにわれわれの生活を規定する社会的諸関係を問題として直視することを妨げている。若者の「日常的な思考」は社会全体の構造によって紡ぎだされているのであってその同じ構造の中におとな世代もまきこまれているのだということ、そしてとりわけこの「減速の時代」においては世代間のギャップは前の世代が用意したからこそ生起しているのだということに注意すべきである。

ことさらに異質なものあるいは異常なものを外部に設定したり排除しようとしたりするのは自らの正統性や正常さを確認しようとする心理的機制であるが、それはつまり自らの正統性や正常さが危機的な状況に置かれているからに他ならない。そうした危機の基盤にあるのは時代の閉塞感あるいは先

行きへの不安であろうという予想を持っているが、本稿ではその問題には立ち入らず、世代間断絶を強調するこの時代の社会意識が若者のコミュニケーションをどう捉えているのか検討する。世代間のギャップに焦点を当てたレトリックが、若者のコミュニケーションの実態とどれほどのギャップをもっているか見ようということである。そしてさらに、世代間の「断絶」として見て取れる事態が実は「連続」の相において理解できること、あるいは世代を超えて社会全体の向かう方向性を先駆的・予兆的に示すものであることを主張したい。

## 2 若者のコミュニケーションへの視線

### 「ケータイで饒舌、会うと無口」

若者のコミュニケーションはとりわけメディアの利用状況に合わせて理解される。石田佐恵子は、青年もメディアもある社会の中での「新しさ」という文脈の中で論じられ、両者がお互いに対して説明の根拠となっているような事態があるとし、この関係性を「『青年論』と『メディア論』の不幸な結婚」と呼んでいる(6)。そうして典型的には、「人間関係を避ける若者」「生身の人間とはコミュニケーションできない若者」といった“病的”なイメージが受け入れられてきた。それは近年焦点を当てられている「ひきこもり」の像とも重ねられて、たとえば次のように描かれる。

情報化社会には、ケータイかパソコンをさわりつづけないと不安な「パソコン依存症」がふえている。[...]彼らは「メールで饒舌・会えば無口」である。[彼らには]「不定愁訴」を訴える潜在的病人が多いという(7)。

ファミリーレストランで二人それぞれが手許のケータイでメール打ちにいそしんでいる多くのカップルを「不思議な動物だ」とする柳田邦夫の観察(8)や、ケータイでいつもつながりたがる若者のコミュニケーションを「サル化」だとする正高信男の主張(9)にリアリティを感じるとすれば、一見、「メールで饒舌・会えば無口」という若者像は事実を表現しているかのように思えるかもしれない。生身の人間関係は避けるがメディアを介せばコミュニケーションできるのが現代の若者の姿である、と。だが現実には、ケータイのヘビーユーザーほど社交的だという調査結果があるし、「ケータイを利用するようになって、友だちと会うことが「増えた」と感じている人は63%、逆に「減った」は1%にすぎない」という結果も出ている(10)。

たとえば1995年と2000年の『日本人の情報行動』調査(11)では、直接会話の時間の長い人ほど電話の回数・時間、携帯電話の回数、ファクシミリの回数、メールの回数すべて多い。こうした関係が生じるのはふだんの関係があるからこそ少ない情報量の交換だけで伝わるのであって、「ふだんからコミュニケーションが豊かな者同士が、さらに関係を深める意味でメールをよく使う」(12)のだと説明される。だから実は、「メールで饒舌・会えば無口」ではなく「メールで饒舌・会っても饒舌」が実態に近いのである。直接会話とメディア使用が量的に比例するというこの傾向は2005年の調査結果では逆転するのではあるが、少なくとも「生身のコミュニケーションが苦手であるがゆえにメディアに頼る」という因果関係が一般に成立してきたわけではなかったし、年長世代の多くがまだその使用に参入していなかった時期だからこそ「新奇」なもの「病的」なものとして眺められていたに過ぎない

とも言える。

そしてここで押さえておかなければいけないのは、そのメディア使用の状況が自分たちとは違うからという理由で断罪する必要はないという点である。実際、ケータイの向こう側にいるのは人間であって機械ではない。「バーチャルな人間関係」とか「つまらない話ばかり」とか軽蔑する前に、彼らが他者との交流をこそ求めていること、そこを見落としてはならない。香山リカは次のように主張する<sup>(13)</sup>。

彼らがこれほど人との会話や交流を求めているとは、と驚くくらい、携帯電話を駆使していつもだれかと何かをやりとりしている。[…]機械相手、お金相手ではなく、あくまで生きた人間とかかわりたい。社会や世間とのことを忘れても、何人かの友だちと何げないおしゃべりをしたい。この彼らの独特な“人恋しさ”の感覚に、これまで私たちおとなはきづいていただろうか。「今の若者はすぐキレて残酷」「ひきこもりなど人ぎらいが多い」と決めつけていたのは、おとなのかん違いだったのではないか。携帯電話などの普及により、やっと「人間とかかわりたい」と意思表示できるようになった若者たち。その思いを大切に、よい形で結実させてやりたい。

大澤真幸が「近接性への欲求」と表現する<sup>(14)</sup>ように、ケータイは他者へのより直接的な接触をこそ志向するメディアである。旧来からの「面と向かった」「生身の」コミュニケーションの価値が低下することはないだろうが、社会の構成が変化し、同心円的な人間関係の下での物理的な近接性に頼ることが困難になっている現在、メディア使用の根底にある他者への渴望を見逃すべきではない。

### 「人間関係の希薄化」

ここまで述べてきたことによって、「量」は多いのだとしても“質”的な問題を抱えているに違いないのだ」という見解が必ずしもくつがえされるものではない。今どきの若者とケータイにまつわるマイナスイメージの一つは「人間関係希薄化」だ。松田美佐は世間に流布する若者のコミュニケーションに関する「評論」を次のように整理してみせる<sup>(15)</sup>。

最近の若者の友人関係は「広いが浅い」。友人がいないのではない。常に一緒に過ごす友人の数は多いが、議論や悩みごとの相談はせず、深入りしないようにつきあっているため、孤独感を感じている。このような若者の「必需品」となっているのが携帯電話である。深いつながりがないため、常に連絡を取り合っていないと「友人関係」が確認できない。だから、携帯電話を使って始終とるに足らない話をしている。

まず若者の友人関係一般が「希薄化」しているのかどうか。松田の整理によれば、さまざまな調査において以下のような結論が出ている<sup>(16)</sup>。すなわち若者の「親友の数」は1982年以降一貫して増加傾向にあり、「心をうちあけて話せる友人がいますか」という問いへの肯定的回答が1970年から1995年までこれも一貫して増加している。また1982年から1992年にかけての調査で親友とは「なんのかくしだてもなくつきあう」が60%、「心の深いところはださないでつきあう」が20%という構成比に

ほとんど変化は見られないし、「生きがいを感じる」のは「友達や仲間といるとき」だというのが1980年以降「スポーツや趣味に打ち込んでいるとき」を抜いてトップであって1970年の38.8%から1995年の63.2%へと増えている。さらに辻大介によれば、1980年に「心をうちあけて話せる友人」がいない者が6.6%（『連帯感調査』）、95年に「何でも話せる友達」がいない者は5.6%（『生活と意識調査』）とほとんど変わらない。70年にそうした友人がいないという回答が24.3%いたことからすると、この25年間はむしろ希薄化とは逆方向に変化したとさえ言えるという（17）。

次にポケベルやケータイの利用との関係については、中村功が「携帯メディアの利用者が表層的人間関係を好むという議論は、一貫して否定されてきた」と結論づけている（18）。すなわち各調査データによると、表層的人間関係をとろうとする者は、ポケットベル常用者の方が少なかったし、携帯メールを利用するほど「自分の本音を話すことが友達づきあいで重要」と考える者が多い。また携帯電話を利用する者の方が深い人間関係を好む傾向があって、逆に「友人であっても互いのプライベートには深入りしたくない」は通話でもメールでもケータイを利用しない者が最も多かった。

「親友」とか「心の深いところ」とか「本音」が大人世代から見て同じものであるかどうかは別の検討が必要だが、若者たちの人間関係が「希薄化」しているという命題はこれらの調査の指標に従う限り成立しないし、ケータイ利用と希薄化が平行に進行しているわけでもない。つまりケータイ利用が原因でそこに結ばれる人間関係の希薄化が進んでいるのではないし、人間関係が希薄化している者がケータイに頼っているのでもないということだ。少なくとも“志向”としては、若者の多数派は「親友」や「心の深いところ」や「本音」を求めているのであって、だからこそケータイを利用するのであり、表層的人間関係を“好んでいる”ということではないことになる。

### 「選択的人間関係」

以上述べてきたことが事実だとしても、若者のコミュニケーションの作法がおとな世代とは違うという感覚が払拭されるわけではなかろう。「深いか浅いか」でないとすればそこに感得される差異は何かという点を説明しようとするのが「選択的人間関係」あるいは「機能分化型コミュニケーション」という概念である。端的に言ってそれは、オールマイティな友人・全面的な人間関係から、部分的・状況選択的な人間関係にシフトしたのだという主張である。その極端な姿はたとえば次のような事例として紹介される。

私の場合、友達は『何をするか』で完全に決まってるんです。カラオケならこの子、買い物ならこの子、エステに行くならこの子、っていう感じですね。カラオケ友達とは買い物には行かないし、エステ友達とは、飲みにいったりご飯を食べたりすることもないんです（19）。

刻一刻変わる「今の自分」にとって必要な役割（機能）を担当してくれるのに適切な相手を、日常的にメール交換をしている複数の人間の中から瞬時に選び出すこの作法は、昨今の若者たちのコミュニケーションのありよう「機能分化型コミュニケーション」を端的に表現しています。/自分が弱気になった時に黙って話を聞いてくれるのはAくん、バイトの愚

痴を肯定してくれるならBクン、相談事を現実的に解決してくれる知恵を与えてくれるのはCさん…といった具合に、メール友達を使い分けているのです(20)。

さらに、「使い分け」を瞬時に行っていく様子を辻は「対人フリッピング」と呼び、そのオンオフの自在な切り替えのためには「時間や場所に拘束されずに相手にアクセスをとることができ、スイッチを切るだけで簡単にコミュニケーションを中断できるメディアには、親和性を示すだろう」(21)と述べる。つまりケータイに親和的だということだ。だからこうした意味ではケータイは「人間関係のリモコン」である。インターネット上での人との関わり方においても、内容や気分に応じてアクセスする場を使い分けるという振る舞いが日常的になっていよう。

またNHKの『日本人の意識調査』から「職場でのつきあい」に臨む人間関係の変化を取り出すと、「何かにつけ相談したり助け合える」ような“全面的”つきあいを望む者が減り、「仕事に直接関係する範囲」の“形式的”つきあいが微増しているが、最も増加したのは「仕事が終わってからも話し合ったり遊んだりする」くらいの“部分的”つきあいを望む者だった。若い世代ほどこうした傾向が強く、親戚や隣近所とのつきあいについても同様である(22)。

軽やかに人間関係をスイッチングしている一方で、公共の場での見知らぬ人に見せる若者の「傍若無人な振る舞い」が問題視されることも多かった。電車内での化粧、路上に座り込むジベタリアン、そしてとりわけメディアとの関係では電車内でのケータイマナーの悪さが取りざたされて、若者のコミュニケーション作法の非常識さとして一種の「社会問題」ともなった。「生身の人間関係を嫌っているわけではなく、本音で語り合うことを避けているわけでもないのはわかった、しかし友人は使い分けると公共のマナーもなくなってないのはやはり異常だ」ということになるだろうか。そこで考えたいのは、若者のコミュニケーションの特質として語られることは本当に若者固有のものであるかということだ。

### 3 消費社会化・都市化の中のコミュニケーション

#### 会話の衰退

【表1】および【表2】は東京大学情報学環による『日本人の情報行動2005』(23)、【表3】および【表4】はNHK放送文化研究所による『日本人の生活時間2005』(24)によるものである。前者の調査における「会話行動」とは10分以上で他の行動との重複可で「会合行動」ではないもの、後者の調査における「会話・交際」とは15分以上で他の行動と重複しないプライベートな会話に限定するが手紙・電話・メールも含む。そうした定義の下で、【表2】は「会話行動」している者がどれだけそれに時間をとっているか、【表4】も「会話・交際」している者がどれだけそれに時間をとっているかという調査結果である。条件の違いから数値には差があるが、1995年から2005年にかけて見られる傾向は両者一致している。

【表1】 会話行動行為者率 (%)

		1995年	2000年	2005年
性別	男性	44.4	32.1	29.2
	女性	45.2	31.9	34.9
年齢	10代	39.1	30.3	25.6
	20代	51.1	33.7	38.9
	30代	47.8	34.2	43.4
	40代	49.3	33.1	34.0
	50代	35.6	32.3	28.0
	60代		26.9	23.0
全体		44.8	32.0	32.3

【表2】 会話行動行為者時間 (分)

		1995年	2000年	2005年
性別	男性	133.8	135.6	175.2
	女性	135.5	127.4	174.0
年齢	10代	130.6	143.9	173.5
	20代	147.8	145.6	225.9
	30代	145.4	149.5	160.7
	40代	125.2	113.8	146.0
	50代	118.9	123.1	167.6
	60代		114.6	150.7
全体		134.8	131.2	167.2

【表3】 会話・交際の行為者率 (%)

	1995年	2000年	2005年
平日	27	24	20
土曜	30	28	22
日曜	30	29	22

【表4】 会話・交際の行為平均時間 (分)

	1995年	2000年	2005年
平日	93	91	101
土曜	132	135	136
日曜	154	148	154

すなわち、仕事上・役割上必要なものは除いてではあるが、10分間あるいは15分間のまとまった会話時間を一日に一度もとっていない人がここ10年間で増えつつあり、最近では大半（7割近くあるいは8割近く）の人が該当しているというのだ。しかし逆に、会話をしている人の会話時間は増加傾向にある。つまり「会話する人」はますます饒舌になる一方で、「会話する人」自体は減り続けている。行為者率は女性および30-40代の年齢層で高く、無職では低く<sup>(25)</sup>、行為者時間は20代がとくに長いという特徴があるが、何よりも、これが決して若者に固有の状況ではないという点に注目しなければならない。

「面と向かって話す」機会を失ってきているのは誰かと言えば、日本人全体であるということだ。社会全体から会話とりわけ「おしゃべり」が衰退している。「若者がやたらとつながりたがるのはなぜか」という問いがあるが、それに対しては「つながりが失われているから」と答えることができる。そして「若はなぜケータイに頼るのか」と問われれば、「近接性への欲求」がそれ以外の方法では満たされないからだと述べることができるだろう。家族や学校や地域社会から「つながりの基盤」



としての意味が薄れ、バラバラでもやっていける社会がつくられてきた。生きるための活動に付随して必然的につながりやコミュニケーションが必要になる時代が過ぎ去り、つながりはそれ自体として追求しなければならないものになってきた。サービスに満ち溢れた便利な社会は、その分人の生活を孤立化させる。

したがって、「つながりへの欲求」もしくは「つながりへの強迫」に駆動されて若者が顕在化して見せてくれるさまざまな行動は、それが時代が失いつつあるものへの渴望を基盤にしている以上は、世代を問わずに全面化していく可能性をもっている。こうしてみると、おとな世代が若者に対して「もっと生身の、濃密なコミュニケーションをはかれ」という視線を送るのは、若者の姿に無意識に現在の自分の姿を投影しているからこそなのかもしれない。過去への郷愁を若者に仮託するという図である。

### 関係の断片化

「選択的人間関係」について概観しておいたが、実はこれも若者に限定的な現象なのではなく、一般的な傾向である。松田は国内複数個所での調査から、都市に住む人ほど人間関係を選択的に築いているという結果を見出し、「日常的に接触可能な人口の増加」という都市的な現象としてこの選択的人間関係をのとらえようとしている<sup>(26)</sup>。参入・離脱が自由で拘束性が低い人間関係は若年層においてだけ広がるわけではない。実際、「隣近所とどれほどつきあっているか」「親戚とどれほどつきあっているか」「職場の同僚とどれほどつきあっているか」を省みれば、“全面的”というよりも“部分的”ないし“形式的”であることの方がすでに多く、先にあげた例ほどではないにせよ私たちは人間関係を「使い分け」ているはずである。それは、「使い分け」ができず「全面的」につきあうしかなかった社会状況が変化を遂げてきたからに他ならない。

オールマイティな関係、生活のあらゆる局面で経験を共有するような関係こそが親密性のモデルであり、たとえば「親友」とはそういうものであった。しかし流動性が高くまたサービスの消費によって成立する現在の生活においては、さまざまなサービスの需給に対応した断片的な人間関係を組み合わせることによってその生活が成り立っている。それゆえに「全面性」は基盤をもたなくなっている。特定の相手との全面的な関係に頼ることは生活のエコノミーにとってむしろ非合理的な選択でさえあるだろう。このように、関係の断片化や「使い分け」が日常生活の物質的基盤の変化を根拠にしたものであるとすれば、それは「若者的」なのでなく「都市的」傾向なのである。

ケータイのマナー問題にしても、最近の調査ではすでに年齢層による有意な差は見られない<sup>(27)</sup>。若者の問題のように見えたのは、若者がまずケータイを使用したからであって、ケータイ使用があらゆる世代に広がればその使用をめぐるマナー問題はやはりあらゆる世代に広がるのである。他のマナーをめぐるでも、最近過激化しているとされる「クレーマー」や「モンスター・ペアレント」「モンスター・ペイシャント」は特定の世代の問題とすることはできない。また統計上、増加しているのはむしろ高齢者による犯罪であるのにそれも世代論としては語られない。新しいメディアが関係すると若者世代の問題だとされるのは、単にその目新しさのゆえに若者固有の新しい問題が生まれるはずだとみなされるということのようである。しかしその「目新しさ」が世代に無関係にしだいに陳腐化していくのだとすれば、それは若者固有ではない時代の変化を表現していることになる。

## 未熟でいられる成熟社会

鷺田清一と内田樹は『幼児化ニッポン』の「明日は」と題した対談(28)で次のように発言している。

**内田** 今の人の未熟さは消費者であることの宿命じゃないかと思うんです。自分を生産には関与しない、もっぱら消費する人間だと思っている。

**鷺田** 消費者であるということは、裏返すと僕らの生活空間自体がサービスで充満しているということ。[…]

**内田** 日本社会が幼児化したのは、1970年代からですね。豊かで安全になった。大人がいなくても回るシステムができたので、ある意味、成熟する必要がなくなってしまった。成熟って、生き延びる知恵だから、危機的な状況がなくなれば必要ないといえないんです。

ふたりは「クレマー」を、自ら責任をとらずにシステムに依存する受動的な存在としてとらえ、現代日本の「幼児化」のひとつの現象だとする。そしてそうした受動的な存在が広がる最大の根拠を、消費社会化、サービス社会化に求めているのである。だからこそ、幼児化は子どもや若者のみに起きている現象ではありえないことになる。より便利に、より快適にという志向がサービスで充満する社会を生み出し、提供される商品やサービスに依存していさえすれば生活が成立するようになった。成熟社会化が、生き延びる知恵を必要としない未熟さを育ててきたのである。

しかもそこでの欲求充足は、コンビニや自動販売機やケータイやインターネットを用いて個人レベルで達成されるものであるから、他者との直接的なコミュニケーションを徐々に不要なものにしていった。システムにアクセスすることでシステムから必要な商品やサービスは提供される。その結果が、見てきたような「会話の衰退」であり、「関係の断片化」である。そして逆にそうした事態の中でコミュニケーションを回復するためのメディアとしても、ケータイやインターネットは機能している。佐藤卓己はメディアがそもそも「間に割り込む」という語源をもつことからしてその本質的機能は統合よりも細分化であると強調する(29)のだが、ここでは細分化する・割り込むとともに統合する・結びつける機能をも持ち合わせているという両義性においてとらえられるのだという点に注意をうながしたい。ケータイこそが、「近接性への欲求」を満たしてくれるのであった。

メディアによって構成されるバーチャルな世界にのめりこむことによって、若者はまともなアイデンティティ形成ができていないのだとするような言説は多い。香山は「子どもや若者にとって、『ネットやケータイのない世界』こそバーチャルな世界にほかならない」(30)と逆説的に述べているが、多くのおとなにとってもすでに、ネットやケータイのない世界に耐えることは難しくなっているはずである。したがって石田が主張するように、「日常生活のなりたちそのものがメディアなくしてはありえない状況においては、メディアによるのではない〈真の〉アイデンティティ形成を区別することはできない(31)」のであって、これは「世代間ギャップ」の問題ではない。ネットやケータイを必要としている社会のありようこそが検証されるべきなのである。

若者に先鋭的・予兆的に現われているコミュニケーションは<孤独への恐怖/他者への恐怖>の両方向に引き裂かれて二極分化の様相を呈しており、その事態は必ずしも安定的な社会関係を意味する

ものではない<sup>(32)</sup>が、年長世代による「近頃の若い者は…」という違和感や嫌悪感の根拠は、年長世代自身の作り出した社会環境そのものに存するという点に注意を促そうというのが本稿の趣旨であった。おとなが築いてきた社会への適応が、若者の「日常的な思考」を形成している。異端視したり排除しようとしたりすることによって、当の社会環境の孕む問題性は解除されることはないのである。

#### ●注

- (1) これ自身は一種の都市伝説である可能性がある。「Hatena::Question」(<http://q.hatena.ne.jp/1129514022>)で正確なソース探しが試みられているが、決定的な証拠は見つからないようだ。
- (2) 張江洋直「社会秩序が成立する機制」、張江洋直・大谷栄一編『ソシオロジカル・スタディーズ』世界思想社、2007年、p.27
- (3) 見田宗介「近代の矛盾の「解凍」」『思想』2007年10月
- (4) この論点については、拙稿「若年フリーターの構造化－格差社会の基礎としての労働市場」『稚内北星学園大学紀要』第6号、2006年で主題的に論じた。
- (5) 「ゲーム脳」の議論のずさんさについては、「斎藤環氏に聞くゲーム脳の恐怖」(<http://www.tv-game.com/column/clbr05/>)、「トンデモ『ゲーム脳の恐怖』」(<http://www.tv-game.com/column/clbr02/index.htm>)。またなぜこのコンセプトが社会に受け入れられたのか、および「ゲーム有害論」の系譜については、香山リカ・森健『ネット王子とケータイ姫』中央公論新社、2004年、p.48-58。
- (6) 石田佐恵子『有名性という文化装置』勤草書房m1998年、p.188
- (7) 小原信「パソコンやケータイの普及で失われる人間性／退化する感性と耐性／現実と幻実の逆転現象短絡的思考生む即時性」北海道新聞2005年6月8日夕刊
- (8) 柳田邦夫『壊れる日本人－ケータイ・ネット依存症への告別』新潮社、2005年、p.25
- (9) 正高信男『ケータイを持ったサル－「人間らしさ」の崩壊』中央公論新社、2003年
- (10) 松田美佐「ケータイをめぐる言説」『ケータイのある風景－テクノロジーの日常化を考える』北大路書房、2006年、p.13
- (11) 東京大学情報学環編『日本人の情報行動1995』東京大学出版会、1996年および『日本人の情報行動2000』2001年
- (12) 小林正幸『なぜ、メールは人を感情的にするのか』ダイヤモンド社、2001年、p.18-19
- (13) 香山リカ「香山リカ 本音のコラム／“会話”求める若者たち」北海道新聞2002年3月22日夕刊
- (14) ジョージ・マイアソン『アイデアとハバースと携帯電話』武田ちあき訳、岩波書店、2004年への大澤真幸の解説、p.110
- (15) 松田美佐「若者の友人関係と携帯電話利用－関係希薄化論から選択の人間関係論へ」『社会情報学研究』2000年
- (16) 同前
- (17) 辻大介「若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア」、橋本良明・船津衛編『子ども・青少年とコミュニケーション』北樹出版、1999年、p.19
- (18) 中村功「携帯メールと孤独」『松山大学論集』第14巻第6号、2003年
- (19) 宇都宮健太郎「機能別な友だち／便利という鳥籠」『AERA』2002年6月10日号
- (20) 今一生『大人の知らない子どもたち』学事出版、2004年、p.20-21
- (21) 辻大介前掲書、p.24
- (22) 同前、p.22
- (23) 東京大学出版会、2006年
- (24) 日本放送出版協会、2006年
- (25) この点は東大調査によるが、掲載した表では省略してある。

- (26) 松田前掲論文
- (27) 松田前掲書、p.8
- (28) 北海道新聞2008年1月4日
- (29) 佐藤卓己「関心を細分化するメディア社会：選択肢増え誘導容易に(自由からの逃走2006夏③)」北海道新聞2006年8月17日夕刊
- (30) 香山リカ『ネット王子とケータイ姫－悲劇を防ぐための知恵』中央公論新社、2004年、p.179
- (31) 石田前掲書、p.199
- (32) この点については、拙稿「メディアとコミュニケーションの現在」(仮)(唯物論研究協会編「シリーズ21世紀の哲学」(仮)第1巻『日本の社会的・文化的変容』所収)において詳論する予定である。

### ●英文タイトル

Glance to young person's communications

### ●英文要約

Older people have, at all times, had a critical view of young people, saying, "Young people these days . . . ." In a mature society of today, however, the generation gap is liable to be exaggerated. Although young people's communication has been open to criticism for being "diluted" and "media-dependent," these defects are in no way peculiar to the young generation. In fact, they are problems facing today's urbanized consumer society as a whole.